東京ジャーミイ金曜日のホタバ

2006年3月24日

あの世での生への備え

親愛なるムスリムの皆様。人生において私たちがいつでも向き合っているにも関わらず、なかなか気づかずにいる事実があります。死と、その後です。

ちょっと振り返ってみれば、貧しい人も、金持ちも、若者も老人も、いい人も悪い人も、抑圧者も弾圧されている人も、みんなこの世界から去って言ったという事実を目にすることができます。多くの人々は、何も残すことなく去っていきました。毎日、私たちが愛する人が、私たちを残して去っていきます。私たちもいつの日か、愛する人たちを残して去っていくのです。どの瞬間にも訪れえる、死の時を待っているのです。今まで、死を免れた人は誰もいない、という真実があります。日々やつれていく体、減っていく髪に「待ってくれ」ということはできないのです。私たちが望むと望まないとに関わらず、誕生によってやってきたこの世界から、死によって去っていくのです。だから、「この世界にいるのは何のためだろう。」と自問することが必要です。この問いの答えとして、アッラーはクルアーンで次のように仰せられています。「（かれは）死と生を創られた方である。それは、あなたがたの中誰の行いが優れているのかを試みられるためで、かれは偉力ならびなく寛容であられる。」（大権章第２節）

親愛なるムスリムの皆様。信仰の六つの基本の一つが、来世を信じることです。来世では、現世で私たちが行なった事の見返りを見出すことになります。私のあり方によって、報奨もしくは罰が与えられるのです。もはやこの世へ戻ってくることはありません。また誰かに対して不正が行なわれることもありません。アッラーはこの真実を、次のように説かれておられます。「一微塵の重さでも、善を行った者はそれを見る。一微塵の重さでも、悪を行った者はそれを見る。」（地震章７－８）審判の日は、私たちには異議を唱える権利がありません。なぜなら私たちの前に現れるのは、私たちが行なった事に他ならないからです。崇高なるアッラーは、次のように仰せられておられます。「一人ひとりに、われはその運命を首に結び付けた。そして復活の日には、（行いの）記録された一巻が突き付けられ、かれは開いて見る。（かれは仰せられよう。）『あなたがたの記録を読みなさい。今日こそは、あなた自身が自分の清算者である』」（夜の旅章１３－１４）「やがて、（終末の）一声が高鳴り、人が自分の兄弟から逃れる日、自分の母や父や、また自分の妻や子女から（逃れる日）。その日誰もかれも自分のことで手いっぱい。（或る者たちの）顔は、その日輝き、笑い、且つ喜ぶ。だが（或る者たちの）顔は、その日埃に塗れ、暗黒が顔を覆う。これらの者こそ、不信心な者、放蕩者である。」（眉をひそめて章３３－４２）

親愛なる兄弟姉妹の皆様。この世での市場においてすら、どんなものであれ見返りなしには手に入れることはできません。永遠の世界で約束されている恵みは、努力せず、備えをせず、手に入れることができるでしょうか。死があり、審判があり、秤があり、スラート橋があり、天国があり、地獄があります。だから、準備が必要です。裁きを受ける前に、自らを見つめなおしましょう。今日のフトバを、ハディースで締めくくりたいと思います。「来世において、人は次の五つのことを問われることなしに、アッラーの御前から離れることはない。生涯をどこで費やしたか、若者時代をどう終えたか、財産をどこで何によって費やしたか、そして知っていることに従って行動したかどうか、である。」